

## イエス傳の史料について\*

山 谷 省 吾

一

イエス傳研究の目標は、歴史上にあらはれた人物イエスの誤りない姿を描出するにある。それが無理な或は不可能な企てであるか否かは暫く之を措いて、この百年の間多くの學者が心血を濺いで努力し來つたその目的は確かに歴史的イエスの把握にあつた。そしてそれは基督教の信仰の上からも歴史學の上からも大切な問題である。何となれば、もしイエスが實在しない假想の人物だとすれば基督教は大なる迷誤となるし、又假令實在してゐてもイエスの姿が曖昧で捕捉し難いものだとするれば、その上に立つ信仰は眞實性に乏しい力のないものとなるからである。又コンスタンティノス皇帝以來羅馬の國教となり、そして中世を通じ現代に至るまで歐洲文化の又世界文化の一大源泉・一大要素たる基督教は、歴史的人物イエスを始祖と考へ主張してゐるのであつて、此始祖を知らずしては基督教史を知り得ない筈だからである。が、かく兩方面から見て重要な問題である丈に、異論や疑點も又多く存在してゐる。

周知の如く近代史學は歐洲の啓蒙時代に始まつたが、それはイエス傳研究に於て始まつたのである。その時まで人々は新約聖書の中に描かれたイエスの姿、殊に第一福音書(マタイ傳)のそれを、そのまま、史的イエスの眞の姿と信じて疑はなかつた。然るに此時期になつて合理主義的・批評的な眼を以て聖書を検討し解釋し始め、その結果超自然的・奇蹟的色彩を拭ひ去つたイエスの姿を以て眞の歴史的イエスの姿となすに至つた。ライマールス(Herrmann Samuel Reimarus)も、パウルス(Heinrich Eberhard Gottlob Paulus)もさうであつた。が彼等は猶ほ淺薄、不徹底であつて、一般世界に大きな影響を與へるには足りなかつた。それが愈々教會の又歴史學上の大問題となつたのは、一八三五年ストゥラウス(David Friedrich Strauss)の有名なイエス傳(Leben Jesu)の出現の時である。ストゥラウスは聖書のイエスをば神話と解した。福音書に物語られて居るイエスを、信徒の作つた信仰の産物に他ならない神話物語と見た。彼は未だイエスの存在を否定したのではないが、その歴史性を極めて稀薄なものとなした彼のこの主張は、否定前の一步まで進んでゐたのである。この大膽なストゥラウスの主張は、人々の注意をこの問題に向はせるのに十分であり、確かに劃期的であつた。彼の後にイエス傳研究の隆盛期がつゞき、史料の綿密な研究とその新しい解釋とが相ついであらはれ、百花亂れて咲くの盛況を呈した。ルナン(E. Renan)カイク(Theod. Keim)の美はしに勝れた叙述、ヴァイツゼッケル(C. Weizsäcker)ホルツマン(H. J. Holtzmann)の鋭い積極的な批評から、降つて最近のブッセット(W. Bousset)ヅヘル

ン(P. Wernle) ブルトマン(R. Bultmann)の新研究に基く新鮮な力のある書物に至るまで、洵に多種多様であつて、教會の傳承に忠實な保守的傾向のもの、イエスの人間性とその英雄的行爲とを描き上げた自由主義的なものから、更にスエトウラウス以上に出でイエスの存在を全然否認せんとする極左的のものに至るまで、人間の考へ得るあらゆる型のイエスをそこに見ることが出来る。——これ等の種々様々なイエスを見て、我々は、恰度三十七年前にハルナツクがベルリン大學の大講堂で『基督敎の本質』なる題目の講演を始めるに當つて投げかけた様な問題に、今日に於ても再び面せざるを得ない。此等のイエスの中で果してどれが眞のイエスの姿なのだらうか。眞のイエスの姿が果して把み得るだらうか。イエス傳研究は結局は不可能な企てではなからうかと。然し我々はこの難問にもかゝらず、猶ほ解決の可能性を信じ、先人の苦心の跡を尋ねつゝ勇を鼓して棘の道を進まんとする。假令我々の試みが成功しないとしても、その獲得は決して少くないであらう。何れにしても、此問題は歴史神學に携はる者の等閑に附すを許さぬ、重要な問題である。そしてその問題は、結局史料の取扱如何に歸すると思ふ。

## 二

イエスは新宗教の創設者・開祖である。そして開祖の多くがさうであつた様に、彼は文字を残さなかつた。聖書は一度だけ、彼が文字を記したことを記してをるが、それは沙の上に記したのであつた

(ヨハネ傳八ノ六)。そして彼について記した書物は少くないが、皆信仰から出る裝飾が附いてをり、中には御光のまばゆくさしてをるものもある。言ひ傳へや神話の類が宗教的信仰に付きものであることは、例へば佛陀について見ても明かである。だから我々は信徒の間から出たのでない、客觀的立場に立つて公平に見公平に書くことの出来る第三者から出た史料を求めるようになる。それが最も信頼し得る、史的價值の大なる史料である。かくして我々は自然に、紀元一二世紀頃のギリシヤ並びにロマの史家達、に眼を向けさせられる。そこに有力な史家達の居たことは、世に隠れない事實だからである。然るに彼等はこの片田舎の預言者イエスには注意も拂はず、興味を持たなかつた。當時の文化人にとつてイエスは、今日の我々にとつての如き人ではなかつたのである。その中にあつて只一つタキトゥス(Tacitus)の極めて短い記事が存在してをる。それは彼の『年代記』Annalen XV. 44に出てをつて、ネロ皇帝の基督者迫害に附加して述べられてをる。即ち、基督者なる名稱の起りであるキリストは、ティベリウス帝の世にユダヤの總督ポンティウス・ピラトゥスによつて處罰された、そして此恐るべき迷信は一時影をひそめたが、再び爆發してユダヤのみならずロマに迄來り、耻づべき惡事が流行して居る云々と書いてある。この記事によつて我々は少くともイエスなる人物が實際生存してゐたことゝ、又彼が處刑されたことは之を知り得る。そしてそれを知り得る丈でも大したことだと云はねばならぬ。但、タキトゥスが此材料を誰の手を経て獲たか、もし基督者の手を経て獲たとすれば史料の價値

が減じはしないかと云ふ議論がある。その他スエトニウス Suetonius の文章にも一寸だけイエスに觸れられた個所があるが、注目に値するものではない。

第三者の立場にあるギリシヤ・ロマの世界から殆んど見るべき何等の文章も残されてゐないとしても、ユダヤ人からはあるものを期待し得るだらうと、人は考へるだらう。ユダヤ人は基督教の反對者である。基督教はユダヤ教から生れたが、生れ出ると共に彼等から迫害され不倶戴天の敵となつた。それ又彼等はイエスについて興味を持ち、従つて少くとも悪口ぐらひは書き残してゐてもよい筈である。當時エルサレムには議論好きユダヤの律法學者所謂ラビ Rabbi の團體のゐたことは周知の事實だからである。かゝる所から、最近ユダヤ人の學者クラウスネル (Klausner) がヘブル語で『ナザレのイエス』なる書を著し(その英譯が出てをる)、ラビの文獻からイエスに關係のある史料を集めてをるが、それも我々の期待にはずれ、極めて僅かしかなく、しかも、イエスが五名の弟子を持つてゐたこと、呪術を行つたこと、賢者の言葉を誹議したこと、律法を毀つ爲めに來たのでなかつたこと、犯罪人として處刑されたことなどごく簡單なことしか書かれてゐない。此等のラビの記事は紀元七十年頃まで溯り得るし、福音書とは獨立して書かれたものと推定され、ある程度までの史料的價値は持たせ得ると考へられるが、餘り高く見積ることは勿論出來ない。——今一つ、夙くから目をつけられてゐたユダヤの歴史家 ヨセフス (Flavius Josephus) がある。此人は紀元六十八年頃反ロマ戰爭に一方の指揮

者として加はりガリラヤで戦つたが、つひに捕虜となりロマに移送され、後ヴェスパシアヌス帝の信任を得赦されてロマに留まり、ロマ人の爲めに『猶太の古代記』『猶太戦争』等の歴史書を書いた人である。その『古代記』の第十八卷三の三に有名なイエスに關する文章がある。それは十三行に亙つてゐて、紀元三十年の頃イエスなる賢人がゐたこと、彼が不思議な業を行ひ又教を爲してユダヤ人とギリシヤ人とを自分の許に引よせたこと、彼はキリスト(メシヤ、即ち救主)であつたこと、彼はピラトにより處刑されたが彼を愛する者達は彼から去らず、三日目に甦つて彼等にあらはれたことなどを記してゐる。がこの基督者の信仰を假定せる如き文章が果して彼自身から出ただらうか、それとも後世の基督者による挿入ではなからうか、この點について研究者の間に議論が分れ、そしてハルナック(Harnack)や、バアキット(Burkitt)の様な人々の辯護論もあるが、多數の學者はその眞正を疑ひ、最近エドワード・マイヤー(Ed. Meyer)も同様の見解を發表してゐる。——可様な理で、ユダヤの地にも亦イエスの史料を見出し得ないとしたならば、我等は止むなく最後の據所である基督教の地盤に赴かざるを得ない。そこには多くの史料が残されてゐる。が、それ等は上に述べた様に信仰と結びついたもので従つて重大な制限を持ち、その使用に際しては多大の警戒を加へねばならぬ。我々は此所に於てイエス傳研究の持つ特殊な難問に直面するのである。

基督教の地盤で最初に書かれたのは使徒パウロの手紙である。その中の一番古いテサロニケの教會へ宛てた第一の手紙は、多分紀元五一年即ちイエスの死後二十年にして書かれたものである。恰度歐洲大戦と今日との距離である。パウロはイエスよりは少し年の若い同時代人であつて、しかもエルサレムに學んでゐたから、假令自らイエスを見ず、イエスの教を直接に受けなかつたとしても、彼の入信後の知合ひの中にはイエスについて多くの報知を持つてゐた者がゐたのであるから、彼も又相當に多くのことを聞いてゐたに違ひない。もしそれを彼が手紙の何處かに記してゐて呉れたとすれば、我々は豊富なイエス傳の史料を持ち得ることになるだらう。然しこの豫想は裏切られ、研究者は又も失望せざるを得ない。パウロは地上のイエス、肉のイエスについては語らない——それが彼の主義であつた。彼の反對者なる猶太主義者は肉のイエス、史的イエスを持ち出してそのイエスとの關係、イエスから選ばれ教へを受け共に生活したことを誇つたのに對し、パウロは自らの救にとつては肉のイエスは何の意味もなく靈のキリスト復活の主が凡てあることを繰り返して力説したのである。即ちパウロは肉のイエスについて語ることを故意に避けたのである。彼はこの世界が二千年の後までも續存し、後世の學者等がイエスの事實を知る爲めに苦心するだらうとは、夢にも思はなかつた。彼は、その當時の多くの信徒と同じく、イエスの來臨は間近に迫りそれと共に世界の終末が來ると信じてゐたのである。——が感謝すべきことには、彼は僅かではあるがイエスについて語つてゐる。それによつ

て我々はタキトウスやラビなどよりも多くの又確かな報知を得るのである。例へばイエスにヤコブなる兄弟のゐたこと、ペテロなどの弟子のゐたこと、婚姻に關し又傳道生活に關してイエスがある教へを爲したること、彼が死ぬる前弟子達と一緒に晚餐を食したことなどを知らることが出来る。そしてこれ等は信仰によつて左右されてゐないイエス生存の確實な證據ではないか。イエスを抹殺せんとする者は、或は神話學から或はある傾向の哲學的理論から之を試みるが、二十年の間に無から架空の人物が作り出され、しかもパウロの如き人にその生命を要求する迄に確かな存在となり得たであらうか。健全な理性の判斷は之を許さない。——パウロ以外の手紙や勸めなどで、第二世紀の初め頃までに出たものは相當の數に上つてをるが、イエスについて直接に記せるものは不思議ではあるが、殆んどない。だからそこを素通りにして行つて一向差支ない。我等の行く先きは、イエスについて記されてをる福音書である。福音書はイエスのことを人々に知らせる目的で書かれた謂はゞイエスの言行録であつて、その史料としての價值が上述の諸文書に比し遙に大なることは、云ふ迄もない。只繰り返して云ふが、教會側から出て居ることゝ、傳道の目的を持つてをるので、それを史料として使用する場合には餘程慎重な態度と用意とを以て臨まねば、その結果は客觀性を失つた物語となり終るであらう。だから過去百数十年に亙る『イエス傳研究』は、この四つの福音書——マタイ傳、マルコ傳、ルカ傳、ヨハネ傳福音書——を對象として、批評的、解釋的、更に又宗教史的、言語學的、文體史的などのあ



らゆる方法を用ゐて、微に入り細に互り、大膽な假説を用ひ、鋭犀な論理により、比較し區別しつゝ、相助け相争ひつゝ、この史料の問題の解決に向つたのである。その研究史の跡を辿りつゝ、この問題の取扱ひ方法の發展に即して觀察するのが最も興味あり且つ理解し易い方法であるが、今はそれが許されないので、只二三の主要點を述べるに留めることにしよう。

#### 四

四つの福音書の中で、誰しも一讀して氣付くのは、初め、三つのもものと第四のもものが、異なる印象を與へることである。初めの三つもその内容を詳細に檢べると勿論各々異なる特質と性格とを持つては居るが、大體同一の立場に立つて書かれ、相互に深い關係を持ち他と併べて讀む時最もよく理解され得るので、此等を『共觀福音書』(Synoptic Gospels, synoptische Evangelien)と呼ぶ。この共觀福音書のイエスに對して第四のヨハネ傳福音書の描き出してゐるイエスの姿は、可なり違つてをる。勿論同じく福音書であるから共通な所・類似な個所も甚だ多く、例へばイエスが洗禮者ヨハネの許で受洗したこと、彼にペテロ以下の十二弟子のあつたこと、彼は彼等を教へ又共に生活したこと、更に又イエスに反對者があつて彼は彼等と戰つたこと、最後にエルサレムで捕縛され裁判され十字架につけられたこと、然しその後復活して弟子達にあらはれたことなど、ヨハネ傳福音書は之を共觀福音書と共有してをるのである。がこれ等共通な事實についての記事も、讀者に異なる印象を與へることは蔽

ひ難い。そして此を全體について見るのに、共觀福音書は内容が頗る變化に富み、事件の迎送に暇なく、色彩が多種多様であつて、恰も春の田舎道を行く如き感じを興へるが、ヨハネ傳は之に對して著しい特徴を示し、譬へば晩秋霧深く立ちこめた曠野にあつてあたりを眺める時の如き感を起させる。讀者の眼に映ずるものはイエスと數多くない人物との姿であり、彼等の姿も薄明るい光に照されてぼんやりとしか見えない。生々として動いてをる多様な人間性に人は接せず、凡てが明瞭を缺き、皆一様で單調である。その描かれた場面も人物も他に比較すると遙に少く、しかもその各々の性格は朦朧としてをる。例へばイエスの敵について見ても、共觀書にはバリサイ人・サドカイ人・祭司黨・ヘロデ黨・律法學者など入れ代り立ち代りあらはれて來るが、ヨハネでは彼等は一様に『ユダヤ人』なる名稱の下に總括されてをる。洗禮者ヨハネは一方では荒野の預言者・悔改めの説教者・蝗いなごと野蜜とを食し毛皮の衣を身にまとふた禁慾者として描き出されて居るが、ヨハネ傳では只イエスの先驅者としてイエスを自分の弟子達に紹介するに過ぎない。威風堂々たる彼の姿はそこには見當らない。その他ニコデモでも、サマリヤの女でも、生れつきの盲目でもイエスの許に來つたギリシヤ人でも、彼等は凡て忽然として現はれ忽然として消え去り、その人物を捕へんとしても容易に捉へ得ない。彼等は實際的人物であつたであらうが、然し同時にある種類の人物の代表者とも見られる。

そして此等の人々を相手にして語り教へてをるイエスについて見ても、その人間的方面は著しく隠

されてゐるのに氣付くだらう。勿論人間イエスの姿が全然見えないと云ふのではない。イエスは眞晝の大陽に照され疲れてスカル（二九ノ二八）の井のほとりで休息した（四ノ六）。彼はラザロの墓で涙を流した（一ノ三五）。十字架の上から渴きを訴へた（二九ノ二八）。ヨハネ傳のイエスは悲み嘆き痛み憐むイエスである。が人間的特徴の著しく出てゐる個所は僅かであり、しかも此等の個所と雖その背後に象徴（シンボリック）的な意味を讀むことが出来る。そしてそれは當然なのである。何となればヨハネのイエスはロゴスである。人となりしロゴスである。即ちヨハネ傳の説くイエスは神の御子であり、世界の救主・世の光と生命であり、更に又復活であり眞理であり道である。懷疑的な弟子トマスは復活のイエスに接して『我が主よ、我が神よ』と云つた（二〇ノ二八）。この神の御子イエスにして初めて、人間の罪を救ふことが出来る。このイエスを神の御子キリストと信せしめる爲めにヨハネ傳は書かれたのであつて、この視角から見て、此福音書は理解することが出来る。

此イエスの本質を福音は人々に告げねばならない。その爲めに、ヨハネのイエスは説話を續ける。その説話は單調で長くて繰返しが多いが、然し同時に莊重で力強く深い印銘を人々に刻し、驚くべき迫力を持つてゐる。『我は生命のパンなり』『我はよき羊飼なり』『我は復活なり生命なり』等の言葉に出會ふ時、讀者は靈魂に喰ひ入り、全人格を揺り動かす宗教的・神的な力の働を感じるであらう。實に巧妙な文章である。がそれ丈、此書が信仰の宣傳書たる特質を具備してゐることを見逃し得ない。

即ちそこに語つてをるのはイエスではなくイエスの口を借りて語る著者であり、彼が自己の信仰を自由自在にイエスの口に入れてをるのではないかとの疑問を懐かざるを得ない。勿論問題をかく簡単に片づけてしまうことは出来ないだらう。イエスの言葉の中に眞の歴史性を見出し得る場合もあるだらうし、それは各々の場合について詳細に検討するを要するであらう。然しヨハネ傳をイエス傳の史料としていきなり使用し得ないことは、大體動かないと思ふ。ヨハネのイエス傳史料としての價値は、第二次的のものであることは、今日の學者がほぼ一致して認める所である。

## 五

ヨハネ傳から共觀福音書に來る時我々は異なる風光の中に出る。恰も薄暗い大伽藍を出で、春光の田舎道を歩む如くである。そこには多くの人物が生き生きと活動してをる。そしてこの多様性は人間生活の自然の状態をそのままに描き出したことを語るものであつて、それ丈共觀書は歴史性を豊富に湛へてをると云はねばならない。例へばイエスの敵は『ユダヤ人』と云ふ代表的な名稱を以て呼ばれず、パリサイ人・サドカイ人・律法學者・祭司黨など種々の名稱を有してをる。イエスの弟子ペテロの姿について見ても、ガリラヤの湖に漁する所を招かれ兄弟アンデレと共に舟と網とを捨て、イエスに隨ひ行くペテロ、弟子達の指導者として常に元氣よく先頭に立つ感激のペテロ、カイザレア・ピリポでイエスをメシヤと告白した彼、次でイエスのエルサレム行を引止めてサタンと云ふ激しい叱責の

語を投げつけられた彼、牢屋にまでも死にまでもと強がりをつたその舌端の未だ乾かぬ中に大祭司の屋敷で三度「主を知らず」とにげた彼、更に又ゲッセマネの園の、變貌の山の彼、此等のペテロに關する繪畫は特殊な性格の持主としての歴史上のある人物の優れた描寫と見ることは出来ないだらうか。兎に角、ヨハネ傳のペテロに比して著しく歴史性に富む共觀福音書の特徴がここに描き出されてをる。かゝる事例を共觀福音書から引出し來るのは、骨の折れる仕事ではない。——然しそれはヨハネ傳と比較しての話であつて、共觀書がイエス傳の史料として十分な價値を具備してゐることを云つて居るのではない。少しく立入つて詳細に検討し、批評的・懷疑的な眼を以てその記事に向ふならば、疑問百出である。そして史料に對して一應批評的懷疑的な態度をとるのは歴史家の義務であり責任である。如何なる鋭い批評と深い懷疑とも堪へ得る確かな岩の上に築かれてこそ、歴史の建築は初めて安全なりと云ひ得るのである。

×

×

×

共觀福音書がイエス傳の史料としてどれ丈の價値を持つかを知る爲めにはその各々の性質、三者の關係、その成立事情、その著者、その年代などを、先づつき止めて置かねばならない。然しそれ等は非常に込み入つた問題であつて、この百数十年間の研究にもかゝはらず、幾多未解決の問題を残してをる。がこゝで目下の問題と關係のある二三の點について述べると、第二番目の一番短く他の二つの

半分を少しく出るに過ぎないマルコ傳が、成立時期に於て最も早いのであつて、主としてイエスの外的の事件につき記してをり、そして他の二つはそれを材料として使用してをること、第一(マタイ)と第二(ルカ)とは、その外に、イエスの教説、言葉、比喩などを集めた『説話集』(Logia)又はQなる符號を以て呼ばれるものを用ゐ且つ各々に特有な史料(S)をも利用したこと、成立の時期は、第二福音書は紀元六五年から七〇年の間であり、第一と第三は八〇年から九〇年乃至九五年の間であること、著者は第二は十二弟子の一人なるペテロの傳道同伴者ヨハネ・マルコであり、第一は所傳にある様に使徒マタイから出たものではなく、無名のユダヤ人基督者の著であり、そして第三はパウロの同伴者ギリシヤ人の醫者ルカから出てをること(但この點につきては異説が有力)、此が廣く認められ信せられてをる説である。そして第一第三の共通史料Qは使徒マタイから出たものと見られ、第二と共に使徒的であり、その素性は比較的良好、後世の人が勝手に作り出した虚構の話ではないことが分る。只問題となるのはその成立期の比較的遅いことである。

が遅いと云つても、マルコ傳はイエスの死後四十年後、Qは多分それよりも早く成立してをる。だから、例へば古事記や日本書紀が神武天皇や崇神天皇について記したのに比べると、年代の隔りは極めて少いと云はねばならない。然し基督教に特有な事情の爲めに、此四十年の隔りが實は大問題なのである。何となれば、イエスに對する信仰が確立し成長したのは、實はこの四十年の間だつたからで

ある。之を具體的に云ふと、イエスの死後間もなく弟子達はイエスの復活を體驗し、そして神の位に上げられた神の御子として救主としてイエスを信じたからである。復活を體驗したペテロは『汝等が十字架につけしこのイエスを神は立て、主となしキリスト(救主)となし給へり』と告白してをる。此イエスに對する信仰は、イエスの死後直ちに生じ、そして基督教最初の教會、エルサレム原始教團の中心原理となつた。此信仰發生の源はイエス自身にあつたと私は考へるが、今は觸れないで置かう。今大切なのは、このエルサレムの原始教會の信仰が偉大なる弟子パウロに於て更に深化し發達して、イエスは神の獨子であり、生ける靈の主であつて現在信徒を支配すると共に將來きたりて彼等を全く救ふと云ふ信仰となつたことである。パウロはこの信仰に生かされ、靈のキリストの助けの下に、當時の世界に向つて大仕掛けな傳道を敢行し、そして彼が六〇年の頃 로마で殉教の死を遂げた時には、この信仰は教會の内部に深く植ゑつけられ弘められてゐたのである。そして共觀福音書中最も古いマルコ傳は、このパウロと並びにペテロが死んだ 로마の教會で書かれ、そしてマタイ傳はエルサレム教會に次で古いシリアのアンティオキアで、ルカ傳は 로마で成立したとすれば、此等の福音書中にパウロ流の上に立つ教會の信仰の影響があつたと見るのは當然である。マルコ傳の中にパウロの信仰がどれ位あらはれてをるかは議論のある所であつて、餘り多くを認め得ないとするのがむしろ通説であるが然し假令パウロ的と云ひ得ない迄も、第一世紀末の教會にはイエスを神の御子として信ずる信仰が

一般に行はれてゐたから、その信仰は福音書の上に顯はれ、全體にある色彩を與へてをることは、誰しも否定し得ないであらう。現にマルコ傳の書き出しには、神の子イエス・キリストの福音の初と記した有力な寫本がある位である。即ち共觀福音書とても單に客觀的に記された公平な歴史的敘述ではなく、教會がその信仰を強める爲め、又は他への宣傳の目的を以て書かれた書物であるから、假令ヨハネ傳程ではないとしても、多かれ少かれイエスへの信仰によつて左右されてをり、その限りに於て歴史的イエスの姿は歪められ曲げられてをると云はねばならない。かゝる制限を持つ史料を基として歴史的イエスの姿を描き出すことが出来るだらうか。そこにイエス傳研究の行詰りがあるではないか。

## 六

ある人物又は事件についての所傳は、時日を経るに従つて次第に發展し新なるものが附加されもとの形から變つて來る。故に歴史的所傳は、概して云へば、初期のもの丈が價値が大きいことになる。そこで共觀福音書中最古のマルコやイエスの教説集Q以前の段階のイエスに關する所傳を何とかして探し出すことは出来ないだらうか。がそれはエジプトの沙の中を掘つて見ても、シナイ山の脩道院の古文書をしらべて見ても、逆も出て來る望はない。するとそれは現存の福音書を基礎として、ある學問的方法を用ゐる之を回復するより他に道はないだらう。人々は熱心に求め、そして求めた人は新らしい



道を發見した。それが最近獨逸に於て發達した様式、史的方法 (Formgeschichtliche Methode) である。それは共觀福音書の各内容を、文體の相違と書かれた動機の差異に基き、種々の類型的部分に分ち、その部分を更に研究することによつて、その中から後に附加された部分を識別し、最古の所傳を定めんとするのである。この類型的部分の分け方は一様ではなく、この研究の代表的學者ディベリウス (M. Dibelius) とブルトマン (R. Bultmann) との間にも、一致を缺いてをる。ディベリウスは説話・物語・傳説・神話等に分ち、ブルトマンはイエスの言葉とイエスに關する物語とに大別し、前者を宣言と主の言葉とに、後者を奇蹟物語と歴史物語及び傳説とに分ち、各々を更に細別してをる。そして各々、最初に存在してゐた可動的な所傳形式が次第に固定して文書となり福音書となつて行く發展の經路を辿り行くのに多大の苦心を用ゐ、その緻密な分析的乃至綜合的才能を遺憾なく示してをる。もし此方法にして成功し、最初の所傳が異なる動機に導かれて複雑化し行く道行を確かめ得たならば、その最初の段階に位する所傳の史的價値は大なるものであらう。がそれでもなほ、一定の動機に支配されないイエスの説教と行爲の記述を福音書中から摺み出すことは、甚だ難いであらう。何となればディベリウスによれば教會最初の所傳は説教の形式をとつてゐたものであるが、説教は原始教會の信仰を他に傳へて信せしめんとした動機によつて支配されてをつて、單なるイエスの追憶と云ふ様なものとは異なるからである。私は最初成立した文章に追憶的動機から生じたものもあると思ふが、此點は今こゝ

では論じないで置かう。何れにしても、デイベリウスに従へば、イエスの史的姿として福音書中から取出し得る部分は極めて僅かであるし、ブルトマンに至つては更に懷疑的であつて、イエスに預言者以上の資格を與へんとする部分は、非歴史的なりとして之を却けんとする。

即ち此様式史的方法は、上述せる所から容易に推知される様に、主觀的判斷の支配を受け勝ちな方法である。福音書を分析して之を一定の形式に當はめる場合、その文體の形式を定める場合、各部分の關係を明かにしその發展を見出さんとする場合、そこに各研究者の主觀的判斷が加はり來ることは、殆んど避けることは出来ない。これがこの派の受ける批難であつて、例へばブルトマンの描いたイエスと、又カール・ルドウイッヒ・シュミットの描いたそれとの間には可なりの相違があるのを見ても、此方法のよつて立つべき客觀的な基礎に於てなほ未だ缺點のあることを思ふ。此派の正否の最後の決定は將來に残さるべき問題であらう。故に此最新の有力な武器を用ゐても、なほマルコ傳の史料としての價値如何と云ふ最初の問題は解決出來ず、そのまゝで今に至つて居ると云へよう。

## 七

かくして人々は現在に於ても云ふだらう、共觀福音書は第一世紀の後半信仰の教會が産出した文書であつて、信仰と事實とが分ち難く混合してをる、それによつて我々はイエスの存在やその受難と死などは之を疑ひ得ないとしても、地上のイエスの在りのまゝの姿を少しく詳細に互つて描出すること

は不可能である。もし勝れた史料がどこからか発見されて來れば別だが、それは全くあり得ないことだとすれば、歴史學的立場からは認められるイエス傳なるものは書けないとの結論に到達するであらうと。——が我々は此結論に至る前に、なほ考へるべき二三の事柄が残つてはゐないかと思ふ。

惟うに原始基督教の様にしかく史料が問題となる歴史は、他に多くの類例を持たぬであらうが、然しある傾向を持つて書かれた史料についても多かれ少かれこれに類似の問題は存する理である。古事記や日本書紀などは勿論、希臘や支那の歴史書とも同様の疑問に陥るであらう。それ所ではなく世界戦争の歴史も、滿洲國成立史も、我々が頭で要求する如きものが果して書き得るであらうか。歴史の確實性には一定の限度があつて、もしあくまで懷疑の眼を以て見ることになれば、その前に立ち得なくなる歴史は頗る多くなるであらう。假令金石文と雖その例外ではない。故にある歴史が果して正しいか正しくないかの判断の基礎には、一種の信仰が横はつてゐて、これを持たぬ者に對しては百の有力な議論も全く無益だと思ふ。例へば唯物史觀の上に立つ歴史家にとつては、原始基督教はつひにはプロレタリアートの解放運動となるだらう。キリスト神話を固執して動かぬドゥレフス(A. Drews)を説得する爲めには、彼の哲學的人生觀を捨てさせねばならない。歴史の眞理性・客觀性は、この限界内にて妥當する。原始基督教の史料は信仰の産物である。それは動かし難い事實である。だからそれは事實を歪曲した報道であつて、それを基として史的事實に到達することは不可能であると、ある

人々は考へる。然し私はそれは早計に失した結論であつて、ある思想傾向の支配を受けてをと思ふ。私は從來の學者のつた歴史的・批評的解釋方法の中に、今一度見直すべき眞實性が包含されてはゐないかと思ふ。

共觀福音書に信仰によつて左右された部分が多いことは確かである。がさうでない部分も勿論存在してをる。此鑽石の中から純金をえり分ける爲めに歴史的・批評的・解釋方法も相當有效だと思ふ。我々は異論の全くない結果を期待せず、大體に於て、信用すべき有力な多數の學者の承認を得れば、先づ満足せねばならない。例へば我々は三つの福音書を比較することによつて、ある物語の發展の跡を辿り得、かくして最初の比較的信頼し得る史料に溯り得る場合に出會する。イエスと富める人との話は、かゝる例として屢々引合に出される(マルコ二〇ノ一七以下、マタイ一九ノ一六以下、ルカ二八ノ一八以下)。マルコには、ある人がイエスの許にかけより跪いて『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐ爲には、我何を爲すべきか』と問うた時、イエスは『何故に我を善しと云ふか、神一人の他に善き者なし』と答へたと記してをり、ルカも同様である。然るにマタイは『善き事について何ぞ我に問ふか、善き者は唯一人のみ』と答へたと記してをる。が後者は明かに後の教會の信仰を反映させてをる。マルコのイエスは『善い』と云ふ形容詞を己れについて用ゐることを許さなかつたのであるが、それはイエスの無罪を信じる後のある教會の信仰の欲せぬ所であつて、それが爲めにマルコの記事を書き改めたのである。我々はこ

こに史料の發展の經過を認めると共に、マルコの記事を信頼すべきものと見て差支ないと思ふ。

又初代教會が使徒を尊敬したことは隠れない事實である。使徒達はキリストから選ばれた福音宣傳者・教會建設者であつて、全基督教の存在は彼等に負ふてゐたからである。この尊敬は紀元一世紀の後半となるに及んで益々顯著になり、聖書の各文書も又教會の信條も使徒に源を發するが故に權威ありとされた。此等の使徒の中でも殊に重んぜられたが、ペテロであつて、ロマの教會は彼の後繼者を以て任じ誇つたのである。然るにそのロマから出たマルコ傳にペテロの度々の失敗やイエスよりの激しい叱責を記してゐるのは、何を語るか。之は明かにマルコが後の教會の信仰によつて左右されない事實に關する記事を持つて居ることを證明してゐるではないか。他の使徒ヤコブとヨハネについても、又イスカリオテのユダについても同様なことが云へる。その他教會は自らが主として信じ禮拜をさへげてゐるイエスの口から『我が神、我が神、何故我を捨て給ふや』の叫びを發せしめてゐるではないか。マルコには、イエスが親族の者に狂氣せりと思はれたことを記してゐるが(三ノ二二)、マタイとルカは之を記さず、マルコはイエスが故郷で奇蹟を行ひ得ずと記してゐるが、マタイは多くの奇蹟を行はずと改めてゐる(マルコ六ノ五、マタイ一三ノ五八)。かゝる例は更に多くを増し加へ得るだらう。我々はよく考慮されて用ゐられる此等の方法が、又洗鍊された様式的方法が、只表面のみを見ず精神の奥底に迄達し得るであらう所の解釋法と相俟つて、イエスの眞の姿を回復し得るものと信じて差支ない。

歴史に對する信仰は、この我々の結論を直ちに否定する如き態度をとらせないであらう。Tantum Iesus cognoscitur, quantum diligitur. 『イエスを知る深さは、愛する深さによつて定まる。』

## 八

私は愈々最後に到達した。がこの講演を終へるに當つて、次の二點を特に注意しておき度い。

第一、今日の歴史學が要求する様なイエスの『傳記』(Biographie)に到達することは、我々には不可能である。従つて『イエス傳』なる語を使用するのは不適當である。マルコによればイエスの物語は洗禮者ヨハネから、即ちイエスの三十歳の頃から書き出してゐて、それ以前のイエスについては記してゐない。此三十年間の歴史は知るに由がないし、彼の誕生についての物語は言ひ傳へであつて史料として用ゐることは許されなからである。又彼の公けの活動に上つた後の事件も、時と處とに従つて順序を追ふて記したのではなく、記者の手中に有する材料をば、只任意に配列したのに過ぎない。各物語を導き出して時と場所に關する記述例へば湖の邊とか山の上とか家の中とかは、カール・ルドウイヒ・シュニットの云ふ『框』(Rahmen)以外に多くの史の意味を持ち得ないだらう。又人はイエスの活動をガリラヤ時代と外國への遁走時代とエルサレム時代とに分けるのを常とする。然し第二の時代として示される如き時期があつたか否か、頗る疑はしい。又イエスの家族についても、父母と兄弟の名前は知れてゐるが、それ以上は分らない。弟子達の中でも、既述の如く、ペテロに關してはその行動

と性格とについて稍詳しく記されてゐるが、その他の者は名前の外は殆んど凡て不明である。彼等に關して傳説は澤山残つてゐるが、それは傳説以上の何物でもない。要するに、イエス傳と云ふ様なものを書くのには、史料が餘りにも貧弱である。我々の書き得るのはイエスの一生の記述ではなく、その面影その印象、その時々々の教へに過ぎない。全き繪畫ではなく、部分的な素描である。がその素描は歴史的に信頼し得るに足るものたり得る。

第二、信仰の眼を以て見たイエスの姿は、歴史的イエスの姿ではないとの命題について、一言附加しておかねばならない。信仰的な眼が事物のありのまゝの相を歪めて見る例は甚だ多い。だから正當にも信仰者の記述は屢々不信任を買ふ。然し場合によつては、そうでないこともある。一體我々が偉大なる人格を描かうとする時、その表面上の事實にのみ着眼し、接觸面のみからそれを試みるならば、それは極めて淺薄な皮相的な描寫となり終るだらう。實證主義の歴史が一般にかゝる缺陷を伴ふのは當然だと云はねばならない。我々は事物の表面を突き破り、その奥にひそむ眞の意味を捉へ、その本質を觀ねばならない。それでこそ、その事物をその人格を眞に理解し得たと云ひ得るであらう。歴史の世界は人格の世界である。そして深い人格を知るものは深い人格のみである。靈は靈によつてのみ理解されると云ふ。此は一般の歴史について云ひ得る所であつて、例へばデイルタイなどの勝れた精神史はかくして生れたものである。イエスは宗教の創始者であつて、自ら信仰に生きた人である。か

かる非凡なる信仰の人を知る爲めに、只單に人格の表面のみを見る丈では不十分である。ある深い同情と愛と信頼とがあつて、又それと結びつく鋭い直觀と叡智とがあつて始めて出来る。故に *Tantum Jesus cognoscitur, quantum diligitur.* と云ふ言葉は、史學上の眞理を道破せる明言だと思ふ。恰度ソクラテスを知る爲めにはクセノポンの散文的なメモラビアではなく却つてプラトンの詩的な洞察に富む *logoi Socraticoi.* が役立つ様に、信仰を以て記された共觀福音書の部分が眞のイエスを寫し出してゐないとな誰が云ひ得るか。この意味に於て我々はイエスを肉となりしロゴスとして觀たヨハネ傳福音書からも多く學び得る所がある。イエスから新に生れた信仰は、イエスの本質と無關係に生れただらうか。他より偶然なあるものがそこに附加されて、弟子達の信仰となつたのだらうか。環境がイエスに對する信仰を作つたか、それともイエスの人格がそれを生んだか。史家によつて異なる答が與へられるであらうが、私は少くとも後の撰擇により多くの道理があると思ふ。啓蒙時代のイエスの姿の如何に淺薄なることよ。その淺薄なのは、只人間の理智のみに基いてイエスの如き特殊の人格を捉へ得ると誤信したからである。故に共觀福音書が信仰の立場に於て書かれてをることは、一面史的イエス再現の妨げとなると同時に、又助けともなる。信仰は常に歴史の世界から追放さるべきものではない。信仰は理性的批評により是正し、その批評は又信仰によつて光を受けねばならない。兩者は一概に相容れないものではなく、互に補ひ合ひ制し合つて初めてその目的を全うし得る場合が少くない。イエスの描



寫をなす時、特にこの點の力説を必要と感ずる。——が然し、吁、之は口に云ふこと易くして行ふことの難い事柄である。故に我々はいたづらにメトードのみを云々してはならない。ブッセットやヴェルンレのイエスをメトードの上から批評することは誰でも出来る。難いのは、彼等の如き勝れた豊富なイエスを書くことである。そしてこれは愛と敬虔の心を以て深く又辛抱強く史料に沈潜し、直觀によつてそれを會得し理解する者の、初めてよくする所である。イエス傳研究者の眞の任務はそこにある。

\*昭和十三年二月五日、京大史學研究會例會にて爲した講演。